

ディケンズが描いた他者の歴史

『バーナビー・ラッジ』

1. 他者と歴史

フーコーが『狂気の歴史』において、理性の歴史によって沈黙を強いられ、隠され、忘れ去られた狂人という社会的な他者に着目したように、¹ ディケンズも『バーナビー・ラッジ』(*Barnaby Rudge*, 1841: 以下、BR)において、狂人を含む様々な他者に焦点を当てて、歴史を描こうとしている。タイトルとして白痴のバーナビーの名前が採用されていることだけを取り上げても、その意図は明らかだと言える。BRは、スコットに影響され、多くの小説家が競うように歴史小説を書いた文学史的背景において、ディケンズが試みた最初の歴史小説である。そのタイトルは、当初考えていた『ロンドンの錠前師、ゲイブリエル・ヴァードン』(*Gabriel Vardon: The Locksmith of London*) この公明正大な錠前師はヴァーデン(Varden)と改名されるものの、活躍の場を失ったわけではないから、BRに変更されている。すなわち、ディケンズは、ヴァーデンその他のプロテスタントの都市ブルジョアが、清教徒革命以来のイギリス史で果たした役割を否定していない。しかし、白痴その他の社会の周辺に位置する他者たちも歴史の進行に関与しているという独自の観方を示そうとしている。この点にも注目する必要がある。

ディケンズは当初、ベツレヘム精神病院(Bedlam)から逃走した3人の精神病患者によって引き起こされたという設定で、ゴードン暴動(1780)を描く計画を立てた。執筆が進むうちに、そのうちの二人は、絞首執行吏のデニス(Ned Dennis)、² ジブシーの血を引く馬丁のヒュー(Hugh)へと姿を変えるものの、精神病患者は白痴のバーナビーとして

暴徒の一角を占めることになる。精神病患者が暴動を起こしたというのはディケンズ独自の発想で、このような史実は伝えられていない。しかし、ピーター・ゲイが『荒涼館』(*Bleak House*, 1852-53) についての論考の中で指摘しているように、小説家が歴史を描く場合、たとえ史実に反する記述をしたとしても、作家の役割を果たすことは十分に可能である (Gay 62-64)。執筆開始時にディケンズは、精神病患者を暴動の中心に据えることにより、他者も歴史を動かしているという歴史観を明確に表現することができる考えたのであろう。

歴史を動かす他者に絞首執行吏やジプシーを加えたのは、ディケンズの社会改革者的な立場が影響したものと考えられる。彼は *BR* の中で暴徒を「不当な監獄規則と、最悪の警察」が産み出した「ロンドンの屑^{くず}とも滓^{かす}とも言うべき連中」と呼び (407)、「監獄規則」が存在せしめた絞首執行吏と、些細な罪で母親を処刑されたジプシーをその先頭に立たせることによって、社会的権威の暴動勃発への責任を追及している。ディケンズが *BR* で社会批判を展開した背景として、1830年代にゴードン暴動前後と同様の危機的状況を見出したことが挙げられる。このことから彼は歴史に循環性があると考え、危機を繰り返す社会的権威を批判しているのである。ホイッグ党の政治家で文筆家のマコーリーは、イギリスの立憲君主制は名誉革命以後、進化の一途をたどったと主張し、直線的な歴史観を唱えるほどに当時の政治体制を信頼した (Macaulay 1)。それとは対照的にディケンズは、危機を繰り返し招いて歴史を循環させる社会的権威に不信感を抱いた。そして、権威に対する他者の反発が歴史的な変化の一因であると考えていたように筆者には思える。

歴史が循環しているという観方は、ディケンズが抱いていた過去そのものに対する興味とも密接に関わっている。ディケンズは過去が悪魔か亡霊であるかのように現在に取り憑き影響を与えていると考えたのだ。

例えば『ピクウィック・クラブ』(*The Pickwick Papers*, 1836-37)で、挿入話の一つを語る老人はその前置きとして、ヒ素を飲んで人知れず亡くなっていた男の話など、都会で過去に起きたという悲惨かつ奇怪な話をする。そして、世間知らずで無邪気なピクウィック氏を人間性の暗い側面へと誘い、彼が後で遭遇することになる欺瞞や裏切りについて警告している(第21章)。また、20年ぶりにロンドンへ帰郷した『リトル・ドリット』(*Little Dorrit*, 1855-57)のクレナム(Arthur Clennam)は、教会の鐘の音を聞きながら、時を遡って子供時代に戻ったような思いに囚われ憂鬱になる(第3章)。このような観方は、過去に郷愁を見出すスコットと、ディケンズとの大きな違いだと言える。

*BR*の登場人物たちに取り憑いているのは、ゴードン暴動の28年前に起きたヘアデイル(Reuben Haredale)殺害事件である。メイポール亭の主ウィレット(John Willet)は、殺害の経緯がはっきりしないルーバンを「生きてはいないし、死んでもいない」と形容するが(16)、³この表現は真犯人のラッジ氏にこそ当てはまる。それは、死んだと見せかけて罪を免れる彼が、殺害現場に現れた幽霊として教会庶務係のデイジー(Solomon Daisy)を怯えさせ、実際には死んでいない夫として妻に金を無心し、忌まわしい過去を忘れたい彼女を心理的に圧迫するからである。

個人的な事件の後世への影響は、歴史小説において描かれるにしても、それほど大きな比重を占めないのが常であるが、*BR*のプロット上では重要である。というのも、ディケンズは前半部で人物たちの影響関係を個人的な範囲に留め、しかもその影響力を主に心理的なものに限定することによって、後半部で彼らが破壊行為に遭い、歴史的な変化を否応なく体感する様子を効果的に描いているからだ。その一例として、ウィレットは、前半部でルーバン殺害事件に脅かされても、自分は何の影響も受けないと思っているが、後半部で暴徒にメイポール亭を破壊され、そ

のショックから痴呆に陥る。すなわち、前半部で過去の個人的な事件に影響されても表面的には変化のない日々を過ごす人物の多くは、後半部になると歴史的な事件の影響を受けて、実際に起きている変化を認識せざるを得なくなる。このことから、ルーバン殺害事件がゴードン暴動を予示していると考えられることも可能ではないだろうか。この二つの事件の関わりは、後に述べるラッジ氏とゴードン卿 (George Gordon) の分身関係によって、いっそう明らかになる。

BR でディケンズが表現する他者と歴史の関わりや、個人的な事件と歴史的な事件との関わりを、ブラントリンガーは「グロテスク・ポピュリズム」と呼ぶ (Brantlinger 65)。ブラントリンガーは、政治的な正統性の有無を一般人の判断に委ねる考え方であるポピュリズムに、不自然で、醜悪で、歪曲されたものに対する執着を意味するグロテスクを冠した。体制側は過去長期間に渡って悪政を続けることによって、虐げられた人民の常軌を逸した反応を招く。あるいはその繰り返しによって時代は推移していくという歴史観が、ディケンズにはあるというのだ。確かに、既に言及したように、ディケンズは社会の周辺に位置する他者たちが歴史に關与する姿を *BR* で描いているし、憑かれたように破壊行為を繰り返す暴徒をグロテスクに描いていると言えるだろう。

しかし、ポピュリズムという表現は、歴史の中心に位置するかに見える体制側の人間も *BR* においてグロテスクに描かれていることに、ブラントリンガーが十分な注意を払っていないことを逆照射しているように思える。筆者が着目するのは次の二点である。まずは、ディケンズが、サーの称号を持つチェスター (John Chester) とゴードン卿のグロテスクな側面を前景化させ、各々の第二の自我を描き出していること。次に、その第二の自我が、身分的に体制側に属する彼らと、彼らの対極にいるはずの社会的な他者との奇妙な共通性を浮き彫りにしていることである。

そうすることによってディケンズは、社会的な他者の歴史への関与を描き、さらに、歴史の真の中心人物が誰なのかを暗示しているではあるまいか。

2. ラッジ氏とゴードン卿の共通性

犯罪者のラッジ氏とゴードン卿が分身関係にあると考えられる理由は、両者とも比喩的に蘇生していることである。ラッジ氏は暴動の起きる5年前にメイポール亭に現れて最初の蘇生を果たし、後半部の冒頭にあたる第34章で再び蘇生する。そして、二度目の蘇生をデイジーが見かけ、それを幽霊話としてウィレット氏に伝える。それはルーバンの弟ジェフリー (Geoffrey Haredale) にも伝えられ、彼に、ラッジ氏が生存していることと兄殺しの真犯人であることを確信させることになる。

ディケンズは、ラッジ氏がいわれの無い悪意から主人のルーバンを殺したことを暗示するために、殺害の動機を明らかにしていない。ゴードン暴動は社会的な根拠がはっきりしない事件であって、カトリック教徒へのいわれの無い悪意によって引き起こされたと解釈できる (Angus Wilson 152)。たとえば、合理的な思想背景が見出されないことから、グレイヴィンはゴードン暴動にファシズムの傾向があると指摘し、BRをファシズム発生の様子が描き出されたヨーロッパにおける最初の例と見なしている (Glavin 95)。フライシュマンは、カトリック教徒の中でも財力のある者のみが破壊行為の標的になっていることと、社会的権威がカトリック教徒の救済を全く念頭に置いていないことに着目し、この暴動を大量虐殺と呼んでいる (Fleishman 105)。

ルーバン殺害事件とゴードン暴動の関わりは、ラッジ氏が「徒弟騎士団」(Prentice Knights) のアジトにたどり着いていることによって裏書

きされている。すなわち、第一の蘇生をしたラッジ氏は、社会的な他者の象徴「さまよえるユダヤ人」のごとくロンドンを彷徨するうちに、親方に対する徒弟のいわれのない悪意が燻るこの場所に到る。ここでラッジ氏は、人の心に潜む悪意を見抜くことにかけては目利きの盲人スタッグ (Stagg) と出会い (159)、後に彼を使者として妻のもとへ送り、バーナビーが暴動に加担する契機を作らせる (383)。しかも、地階にあるアジトは BR における文化または歴史の下層を象徴する。それは暴動の勃発によって上層の世界と入れ替わり、自他の枠組みをはずして常道を逸脱させることによって、バフチーンのカーニヴァル的な世界を現出させる。要するに、ディケンズは、ラッジ氏の主人殺しの背景にあるのと同種の個人的な悪意の噴出によって、ゴードン暴動が起きたことを示唆しているのである。

ラッジ氏が第二の蘇生をするのと同時に、ゴードン卿も他者として蘇生する。メイポール亭の寝室でまるで棺台 (bier) に横たわるように眠っていたゴードン卿は、ワラキア公ヴラド・ツェペシュ (Vlad Tepes) がドラキュラという他者として棺桶から蘇るように、ここでは他人の思惑に踊らされた他者として目覚める (303)。そして、暴動を起こすべくロンドンに向かい、1778年のカトリック教徒開放令に反対する陳情書を国会に提出するのである。このときのゴードン卿の他者性は、「棺台」で眠る彼がユダヤ人になった夢を見ていること (306) に裏づけられる。ヨーロッパ社会の伝統的な他者としてのその姿は、彼が「偽りの熱情にかられやすい」(303) という欠点を利用された結果、歴史の中心で貴族として本来果たすべき役割を完全に見失ったことを暗示している。

他者としてのゴードン卿はバーナビーを彼自身の鏡像と見なし、陳情書提出後に自分自身の代役としてこのバーナビーを暴徒の先頭に立たせている。出会いのときの彼らは、ともに周囲の状況を全く理解していな

い。ゴードン卿は、国会議事堂に同行する群衆が「生まれてから今まで賛美歌も聖歌も一度だって聞いたことのない連中」で、「頭に浮かんだ卑猥な歌詞だろうと、ナンセンス・ソングだろうと何でも歌っていた」のに全く気づかず、「信徒の敬虔な振舞にたいそう感動し、かつ喜んでいた」(402)。一方、バーナビーは人込みの中で金が儲かるというスタッグの言葉を信じ、母親が制するのにも聞かず、また群衆がしていることにも全く気づかず、彼らに加わろうとしていた。

彼らの鏡像関係は、息子を指して母親が「この子は頭が正常ではない」と言うのに対し、ゴードン卿が発した「真理を求め正しい大義を支える者が狂人だと見なされるとは！」(400)という反論からも明らかだ。なぜならば、この反論は結果としてバーナビーに暴動への道を切り開くことになるからである。この反論はまた、ゴードン卿が本来果たすべき役割を見失ってしまったことを無意識的に感知した結果、自己憐憫の情から発したものであるように読める。それゆえ、バーナビーがゴードン卿の分身であり、邪悪な性向を彼に伝える父の分身でもあることを考慮するなら、ゴードン卿とラッジ氏はバーナビーを介して分身関係にあると見なすこともできるはずだ。

他者としてのゴードン卿はプロテスタントイズムを理解することができない。それは彼が「徒弟騎士団」のタパーティット (Simon Tappertit) やデニス^{ア-ネスト}を宗教的に熱心だ^{ア-ネスト}と見なしていること(301)に表れている。というのも、タパーティットは親方への悪意に衝き動かされて無政府状態を作り出そうとしているし、デニスは罪人の中でもメアリ・ジョーンズ (Mary Jones) のような若くて美しい母親を処刑する際に感じるのと同じ加虐的な喜びを、破壊行為に見出しているに過ぎないからである。⁴ デニスが自分の職業を形容するのに用いる「プロテスタント的」(311-12) という語も、暴徒たちが都合よく解釈したプロテスタントイズムから派

生していると考えるべきだ。彼らは、暴動に同調しない人物なら、同胞のプロテスタントでも不当に扱う。だからこそ、善意のプロテスタントで忠臣のグルービー（John Grueby）は解雇され、親切なプロテスタントのヴァーデンは、ゴードン卿の秘書で煽動的なガッシュフォード（Gashford）に「邪悪な男」（malignant, 302）と呼ばれるのである。⁵

1841年の序文でディケンズは、ゴードン暴動の教訓の一つとして「宗教動乱と誤って呼ばれるものが、信仰のない人々によって安易に起こされていること」（3）を挙げているが、これを「宗教と誤って呼ばれるものが、信仰のない人々の悪意によって安易にでっちあげられていること」と読み替えることも可能であろう。ディケンズは、ゴードン動乱が悪意に毒された宗教的大義に負っていることを暗示し、しかも個人が悪意から起こした殺人事件にそれを予示させながら、歴史に名を残す人物の大義が歴史を動かしているわけではないことを、主張しているように筆者には思えてならない。

3. チェスター氏の他者性

ガッシュフォードの黒幕チェスター氏は、自分の手を汚さずにウォレン屋敷を破壊してヘアデイル氏への敵対心を満足させ、暴動が終結して新しい秩序が築かれた後も、貴族の国会議員として巧みに世渡りを続けていくであろうと、小説の前半では予測できる。しかし、彼は廃墟と化したウォレン屋敷に小説の結末部で現れると、拒むヘアデイル氏に決闘を挑み、その結果刺殺されてしまう。ここに来て、なぜチェスター氏はヘアデイル氏に敗れなければならないのだろうか。しかも、死に顔が歪むのを恐れて無理に笑顔を作ろうとするグロテスクな仕草（680）によって、なぜチェスター氏は自分こそが夢の中でヘアデイル氏に取り憑く怪

物であることを暴露しなければならない(672-73)のだろうか。

断末魔のチェスター氏のグロテスクな仕草は、敬愛する世知の権化チェスターフィールド伯爵(Earl of Chesterfield)の役を演じ通そうとしていることを表している。⁶しかし、演技したことが逆に、伯爵を手本にしたエレガントな言動の背後にある第二の自我を表出させてしまっている。BRにおいて「芝居がかった」(theatrical)や「曲芸」(performance)という演技に関連する語は、それらの語が指す行為の主の邪悪さを示している(Glavin 98)。タパーティットが「徒弟騎士団」の酒宴において親方への嫌悪感や社会の進歩的風潮の害悪について演説をたれる様子は「芝居がかった」と形容されている(70)。また、渡り鳥のグリップ(Grip)は治安判事の前で「曲芸」を披露することによって、後々バーナビーが死刑宣告を受ける一因を作っている(391-93)。

グリップは「オレハ悪魔ダゾ」(389)と言い、邪悪な一面を曝け出しながら治安判事の興味を引く。そして判事の屋敷で「曲芸」を披露することになるのだが、チェスター氏も「チェスターフィールドを造れるのは、まさに悪魔だけだからな！」(192)と言って、その世知に感嘆しながら、伯爵を演じる自分自身も悪魔的であることを示している。ここで思い出されるのは、ゴシック小説における第二の自我表出の契機が、悪魔への魂の譲渡として表現されること、そして、チェスター氏にゴシック的な悪漢としての面が見出されることである。マシュー・ルイスの『修道僧』(*The Monk*, 1796)などの「迫害される処女」をテーマとするゴシック小説において、悪漢が自分の娘や妹を性的に圧迫するように、BRでもチェスター氏が息子の恋人エマ(Emma Haredale)を、ガッシュフォードを代役に立てて虐待しようとしている(677)。

ゴシック的な悪漢はカトリックの修道士であることが多く、プロテスタントのチェスター氏にその側面を見出すのは奇異に感じられるかもし

れない。しかし、デニスの場合のように彼の言う「プロテスタント的」も、本来のそれではない。彼は、息子エドワード（Edward Chester）とエマの結婚を邪魔するために自分が行っている卑劣な行為を指してこの言葉を使用し（227）、国会議事堂前で、街燈を壊し巡査を襲う「プロテスタント的」な暴徒たちと一緒にあって、通りがかりのヘアデイル氏を負傷させる。それが真のプロテスタントらしからぬ行為であることは、グルービーがヘアデイル氏に手を貸し、舟に乗せてその場から去る手助けをすることによって示唆している（363-66）。

さらに、チェスター氏はフランス語を修得するためとはいえ、イエズス会によって1593年に設立された実在の学院、聖オメール（Saint Omer）で教育を受けており、そこでヘアデイル氏やガッシュフォードと知り合っている（359）。このことから、チェスター氏はゴシック的な悪漢としての側面を持つだけでなく、カトリック教徒が社会的他者と見なされる要因を結果的に作ったイエズス会士の役割さえ担っていると解釈できる（Wilt 75）。カトリック教徒がイギリス社会の潜在的な反逆者と見なされるようになったのは、1570年に教皇ピウス五世がエリザベス一世を破門し、イングランド再改宗のためにイエズス会士を送り込んできたことに端を発するからである。

再改宗を通じてイングランドを宗教改革以前に戻そうとしたイエズス会士には復古主義的傾向があるが、この点からもチェスター氏にイエズス会士的な側面があると言える。それはエドワードへの態度に表れている。エドワードが将来有望なプロテスタントの貴族としてイギリスの将来を担う立場にあるにもかかわらず、彼は息子が独立して社会の進歩に貢献するのを妨げようとするからだ。以下の引用は、息子に財産目当ての「山師」となって金持ちの娘と結婚するよう説くチェスター氏の言葉である。

“All men are fortune-hunters, are they not? The law, the church, the court, the camp— see how they are all crowded with fortune-hunters, jostling each other in the pursuit. The Stock-exchange, the pulpit, the counting-house, the royal drawing-room, the senate, — what but fortune-hunters are they filled with? A fortune-hunter! Yes. You *are* one; and you would be nothing else, my dear Ned, if you were the greatest courtier, lawyer, legislator, prelate, or merchant, in existence. [. . .]” (135)

チェスター氏は以上の言葉を通じてエドワードに、父親に対する不信感だけではなく、イギリス社会そのものに対する絶望感をも植え付ける。そうすることによって、彼は歴史が進展するのを妨げているのである。

ディケンズは歴史に循環性を見出しても時代を後退させてはならないという信念を持っていた。その証拠に、暴動を通して社会に混乱をもたらしたゴードン卿、デニス、タパーティットを復古主義者として非難している。ゴードン卿はエリザベス一世の治世を理想とし、カトリック教徒の権利が拡大されつつある 1770 年代を、ガッシュフォードの言葉ながら、「処女王エリザベスが墓の中で涙され、血を好むメアリが陰険な眉をひそめつつ我がもの顔にのし歩く」危機 (290) と見なしている。デニスもカトリック教徒の権利拡大を嘆き、それを絞首執行吏の仕事の減少と関連づけて、孫たちが祖父の頃はよかったと嘆くことになるだろうと述べている (312)。タパーティットは、徒弟が思い通りに休暇を取れないという「圧制」が加えられたのは「時代の進歩的精神」によるとし、「徒弟騎士団」は「古きよきイギリスの慣習を復活させる以外は一切の変化に抵抗せねばならぬ」と主張している (76)。

そのタパーティットとチェスター氏の共謀関係は、カトリック教徒による陰謀であるかのように描かれている。なぜなら、チェスター氏がタパーティットからのメモを見て、「どこで見つけたのかね、まるで火薬陰謀事件（the Gunpowder Plot）じゃないか」（203）と召使に漏らしたことは、1605年にガイ・フォークス（Guy Fawkes）を首班とするカトリック教徒が議会を爆破してジェームズ一世と議員を殺害しようとした事件を、読者に思い出させるからである。ウィルトはこのような含みを念頭に置いて、タパーティットをイエズス会以前のカトリックの宗教的、軍事的団体であるテンプル騎士団の一員にたとえている（Wilt 85）。

復古主義的なカトリックがイギリス社会に与える影響は、グルービーによる「メアリ（Mary Tudor）は生前よりも墓に入ってからの方がずっと多く害毒を流しています」（290-91）という言葉にも暗示されている。彼はゴードン卿やガッシュフォードと異なり、メア리를イギリスにおけるカトリック教徒一般の象徴と見なして攻撃しているわけではない。グルービーは、メアリの分身であるイエズス会士の到来によるカトリック教徒自身への悪影響が1780年になっても続いていること、しかも、間接的ながら暴動を導きつつあることを憂えている。だからこそ彼は、暴動の中で逃げ惑うヘアデイル氏や酒問屋といったカトリック教徒を救うのに一役買うのである（549）。

チェスター氏が最後に暴露した怪物の姿は、ゴシック的な悪漢やイエズス会士としての側面であった。しかし、最終的には1829年の法令によりカトリック教徒が市民権を得ることから、イエズス会士の役割は無に帰しつつあった。それに加えて、エドワードが家出したことにより、チェスター氏は息子の結婚によって経済的な安定を得るという望みを絶たれている。すなわち、彼は社会で生きていく術と存在意義の両方を失いつつあったのだ。彼の宿敵ヘアデイル氏も同様の状況にある。彼は屋敷

を失った。そして、兄殺しの犯人を死刑に処し、姪のエマを養育するという生きる目的も失った。要するに、イエズス会士とイエズス会士に窮地に追い込まれた同胞という表裏一体の分身関係にあった両氏は、暴動後のイギリスに居場所を持たないのである。チェスター氏がヘアデイル氏に決闘を挑んだのは、イエズス会士としての最後の仕事だったのだ。彼は16世紀以来イエズス会士がそうしてきたように、ヘアデイル氏に反逆者としての汚名を着せなければならない。だからこそチェスター氏は自らが敗れてでも、ヘアデイル氏を殺人者にして懺悔の日々を無理強いし、それを決して忘れさせないために、自分の恐ろしい怪物の姿を彼の目に焼き付けようとしたのである。

4 . 過去からの影響の終結と時代の転換点

ディケンズがゴードン暴動を最初の歴史小説の題材に選んだ理由として、この事件を時代の転換点と見なしていたことが挙げられるだろう。イギリス社会からの退去を余儀なくされるチェスター氏とヘアデイル氏が古い時代を象徴し、エドワードとその友人のジョー（Joe Willet）が新しい時代を象徴する。イギリス社会に絶望したエドワードは、1763年のパリ条約でイギリスが西インド諸島全土を獲得したのに呼応するかのように西インド諸島に渡り、プランテーション経営に着手する。ジョーはアメリカ独立戦争にイギリス兵として参戦する。19世紀のイギリスは工業生産力や交通網の拡大に加え、帝国主義的な支配力の増強によって覇権を握ったが、二人はそうした時代の先導役となる。「時代は変わったのですよ（564）」という新しい時代到来の宣言を行うのはジョーであって、歴史の進展という点から見れば、彼やエドワードこそ、その中心に位置することがはっきりと示唆されている。その一方で、チェスター氏とヘ

アデイル氏は旧勢力として周辺に追いやられてしまう。以上の古い時代と新しい時代をそれぞれ象徴する二組の人物たちは、ディケンズが確かな歴史観を持っていたことを表している。

従来、ディケンズには歴史観がないと指摘されてきた。この種の指摘をした代表的な批評家としてスティーブン・マーカス (Marcus 172) やエドモンド・ウィルソン (Edmund Wilson 18) がいる。しかし最近では、ディケンズは独自の歴史観を持っていたと指摘する批評家が現れている。「グロテスク・ポピュリズム」を提唱したブラントリンガーはそのうちの一人である。筆者もディケンズは歴史小説において独自の歴史観を展開していると考えられる。歴史に循環性を見出すことや復古主義への反発はその一部である。それらに加えて、過去からの影響が一応終結した時点を時代の転換点だと見なしていることも、彼の歴史観の一部をなしていると言えよう。イギリス社会において居場所を失うチェスター氏とヘアデイル氏は、16世紀における宗教対立の18世紀への影響が一応は終結し、イギリス社会が次の段階を迎えたことを暗示している。一応の終結というのは完全な終結はあり得ないからである。実際にディケンズはゴードン暴動の惨状が1830年代に繰り返されるのではないかと憂えていた。また、カトリック教徒は1829年に市民権を得た後でさえ、16世紀以来の宗教的な偏見から完全に解放されたわけではない。それでも時代は区切られたわけであって、エドワードがヘアデイル氏の姪を妻に迎えたことも、古い時代の終わりを印象づけている。

未来への推進力と過去からの影響力のせめぎ合いが歴史を作っている。ディケンズはそう考えていたのではないか。というのは、BRにおいて復古主義は時代を進歩させる推進力としての役割を果たしているからだ。エドワードが国外に活路を見出すのは、復古的なチェスター氏によって、イギリス社会に対する絶望感を植え付けられたために他ならない。ゴー

ドン暴動という歴史的事件にしても、イギリスの歴史を推進してきた都市ブルジョアと、それに反発する復古主義的な勢力のせめぎ合いの瞬間だと解釈することができる。復古主義的な勢力を、デニスやバーナビー、タパーティットという社会的他者と、第二の自我を表出させながら彼らとの共通性を露呈するゴードン卿やチェスター氏が象徴しているのだ。そして、このどちらかが欠ける歴史は存在し得ないと、ディケンズは主張しているのである。

注

- 1 フーコーは、18世紀末に狂気が精神病として制定されたときに理性と狂気の対話は完全に途絶え、狂気の側の「不完全な言葉のすべてが忘却の淵にしずめられた」と指摘している (Foucault x)。狂気が社会から隔離されることには、ディケンズも疑問を投げかけている。彼は、悪意に満ちた治安判事に「(バーナビーを) どうして閉じ込めておかないんだ。われわれは州立施設のためにたっぷり税金を払ってるんだぞ」(390)と言わせ、この件について読者に再考を促している。
- 2 ディケンズは同名の絞首執行人をモデルにしてデニスを描いている。実在のデニスは1771年から86年にかけてこの役職にあり、ゴードン暴動で暴徒に加担したが、処刑は免れた。絞首執行人は当時、役人でありながら非差別的な扱いを受ける社会的他者だった (Bleackley xviii)。
- 3 1841年の序文とBR本文からの引用は、引用文献に挙げる2003年のペンギン版から。邦訳は主に集英社の小池滋訳を使用。
- 4 メアリ・ジョーンズが実在の人物であることは、1868年の序文(引

- 用文献に挙げる 1986 年のペンギン版に掲載)でディケンズ自身が触れている(41-42)。ジョーンズは 5 ポンド半ほどの布を万引きし、執行猶予になる程度の罪ながら、法廷での態度が悪かったために、実在のデニスによって処刑された。この版に付けられたスペンス(Gordon Spence)の注によれば、彼女は 1771 年に処刑されたのだが、ディケンズは 1777 年だったと勘違いしている。
- 5 “malignant” はイギリス史においてチャールズ一世を支持する王党派のことで、議会派が付けた名称を指す。しかし、バウエン(John Bowen)による 2003 年のペンギン版の注によると、初期のプロテスタントがカトリック教徒を指して用いることもあった。
- 6 チェスターフィールド伯爵(1694-1773)は、18 世紀のイギリスにおける政治家であり文人でもある。彼が息子に宛てた書簡は才気と機知に富んでいるが、世渡りのための偽善や欺瞞を説いているように見える箇所もある。

引用文献

- Bleackley, Horace. *The Hangmen of England: How They Hanged and Whom They Hanged*. Wakefield: EP Publishing, 1976.
- Brantlinger, Patrick. “Did Dickens have a Philosophy of History? The Case of *Barnaby Rudge*.” *Dickens Studies Annual* 30 (2001): 59-74.
- Dickens, Charles. *Barnaby Rudge*. Harmondsworth: Penguin, 2003.
- . *Barnaby Rudge*. 1973; Harmondsworth: Penguin, 1986.
- . *Little Dorrit*. 1967; Harmondsworth: Penguin, 1985.
- . *The Pickwick Papers*. Harmondsworth: Penguin, 1988.
- Fleishman, Avrom. *The English Historical Novel: Walter Scott to Virginia*

- Woolf. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1971.
- Foucault, Michel. *Madness and Civilization: A History of Insanity in the Age of Reason*. Trans. Richard Howard. 1965; New York: Vintage, 1988.
- Gay, Peter. *Savage Reprisals: Bleak House, Madame Bovary, Buddenbrooks*. New York: Norton, 2002.
- Glavin, John. "Politics and *Barnaby Rudge*: Surrogation, Restoration, and Revival." *Dickens Studies Annual* 30 (2001): 95-112.
- Macaulay, Thomas Babington. *History of England from the Accession of James the Second*. Vol.1. McLean, VA: IndyPublish.com, 2002.
- Marcus, Steven. "Sons and Fathers." *Dickens: From Pickwick to Dombey*. 1965; New York: Norton, 1985. 169-212.
- Wilson, Angus. *The World of Charles Dickens*. London: Secker & Warburg, 1970.
- Wilson, Edmund. "Dickens: The Two Scrooges." *The Wound and the Bow*. 1929; New York: Oxford UP, 1959.
- Wilt, Judith. "Masques of the English in *Barnaby Rudge*." *Dickens Studies Annual* 30 (2001): 75-94.
- ディケンズ, チャールズ『バーナビー・ラッジ』小池滋訳 .集英社 ,1975 .